

## はしがき

——これから生きる人に寄り添う社会政策を目指して——

### 人生と社会政策

人生は生まれてから死ぬまでの冒険でもある。それは過去から引き継がれ、未来につながる。過去を学び、いまを知り、未来につなぐ「営み」に社会政策は深くかかわっている。人間は忘れやすい動物である。本書で展開する多様な視点も、お金や産業社会の強い論理でかき消されやすい。そこで、お金や産業社会の論理を超えるべく、人生（ライフコース）の論理に焦点を当て、人生を途切らせない施策である社会政策の考えを本書で学んでもらえることを期待している。

皆さんにとって社会とはどのような存在だろうか。社会は、その構成員である個人の相互関係で作られ、絶えず変容している。第1章でも述べられるが、人間は光合成をする植物と違い、自らエネルギーを作り出せない。そこで生存のために創意工夫をしてきた。その1つが暮らしを支える政策「社会政策」であり、本書はその入門書である。

本書は、高校での公共・政治経済・現代社会などの内容と大きくかわる。大学では批判的に物事をとらえ、自分の問題意識を専門的な学問として育み、それを他者と共有・発展させていくことがよりいっそう重視される。受験勉強のための学習を超えて、本書を通じて、これまでのあなたの人生やこれからの人生、それを支える社会政策の問題をじっくり考え、本当の「学び」への気づきや導きになるように企画した。

われわれは、労働を通じて収入を得て、食糧などの必需品と交換し、それらを消費して生活をしている。このサイクルがうまくいかなるときがある。出生期から幼少期にかけての健康・栄養・教育への配慮、進学し就職するまでの健全な心身の成長、結婚や出産や子育てなど家族形成での支援、退職後の高齢期の過ごし方など、これらを個人の力（自助）で切り抜けていくことはできない。

そこでわれわれは、誰もが生まれてから死ぬまでの人生（ライフコース）のどこにおいても、どのような状況でも、助け合い生活し続けることが可能なようにする「アイデア」を創造し実現してきた。それが社会政策である。その「かたち」は実に国や地域で多様であり、多様で複雑な生成・発展を遂げている。その中で、われわれの生活に大きく影響しているのが経済である。経済の「かたち」は家族や政治や企業や仕事の「かたち」を大きく規定する。われわれは資本主義という経済システムの中にいるが、これから紹介していくように課題は多い。この仕組みを問い直し、誰にとつ

でも豊かな社会を目指していくことが社会政策の課題である。

そこで、社会政策とは「生活と労働が維持されるように、市民や政府が作り出す施策」とひとまず考えておきたい。そして、あなたやあなたの大切な人、周りの人たちの人生にとって社会政策はいかにかかわっているのかを可視化できるように本書は構成した。

### 本書のねらい

社会政策の学びは、「問い」から始まる。例えば、なぜ物質的には豊かなのに貧困が問題となっているのか。なぜ、いい仕事に就けるかどうか不安にさいなまれるのか。なぜ病気や老後のことを心配するのか。これらは社会政策が正しく機能していれば、なくなっていくものである。こうした問題が発生しているならば、社会政策がない、あるいは機能していない状態である。では、なぜそうなっているのか「問題意識をもつこと」、「問いつける」ことが、社会政策の発展や進化には欠かせない。よって、われわれの暮らしにある問題を「問う」姿勢が社会政策の学びの最重要ポイントである。

様々な領域における問題意識をもってもらうための「問題提起の書」であり、社会政策の体系を理解してもらう「教科書」でもある。個人と社会の関係に不安や不信が強くなりつつある中で、誰の人生をも途切れさせない施策を生み出すアイデアをこれまで人類は国・地域ごとに作ってきた。SDGsを挙げるまでもなく人口・環境問題などの解決は、やや大げさではあるが、人類の存亡をかけた問題である。それぞれの暮らしを途切れさせないように社会政策を次世代にどう引き継ぎ、発展・進化させていくか、いまはまさに分水嶺の時代である。

現在から未来に向けて、現在ある施策がいかにわれわれの不安や不信に対応できていて、いかに対応できていないかを理解することに力点を置いた。そのうえで、強調したかったのは、社会政策は私たちが作り育てているということである。特に「常識」や「標準」とらわれず、多様な人々が一緒に生活することへのアイデアはまだ不足している。いまの世の中、不安と不信が強くなっていると感じるならば、それを安心と信頼に変えるアイデアが社会政策に求められている。それを生み出すのは政治家でも、官僚でも、研究者でもなく、生活者である市民それぞれの立場から表出されるニーズの共有からである。

本書は、社会政策は何ができるのかということを念頭に置いた書籍であるが、問題に対する答え、簡単な解決策を掲載しているわけではない。初めて社会政策を学ぶ読者、学生の皆さんに少しでもわかりやすい教科書として使用できるように、キーワードに側注をつけ、用語等の解説を行っている。しかし、紙幅の関係上、社会政策の過去から現在までの歴史のすべてを網羅しているわけではない。その点は別途他書で補完してほしい。

社会政策には「完成形」は存在しない。本書を通じて、読者が社会政策という共有財産をいかに発展させ、機能させていくかということに関心をもってもらえることを期待している。この社会政策を発展させる作業は「わたし」という単数形ではなく、「わたしたち」という複数形で行うことに意義がある。単数である個人がバラバラではなく、つながりをもったコミュニティから支えられる、そんな施策が充実していく契機に本書が貢献できれば、望外の喜びである。

### 本書の構成

こうした特徴をもつ本書の構成は以下の通りである。

本書は2部構成であり、第I部は「ライフコースと社会政策」とし、子ども期、進路選択期、成人期・壮年期、高齢期という4つの段階で起きる生活問題に対して社会政策がいかに機能、あるいは機能していないかを述べている。本書が人生を軸に研究者の研究区分ではなく、人生区分に沿って社会政策を理解してもらえるよう工夫している。

第1章(所道彦)は、私たちの生活と社会政策の関係から、なぜ人間社会に社会政策が必要とされているのかを全体像を示しながら述べている。

第2章(相馬直子・二本泉)は、子ども期の社会政策について述べている。世界と比較し日本の教育が異常なほど市場化している中で起きる問題や、児童虐待、移民の子どもなど、われわれ大人の目線から消えてしまいやすい対象を幅広く掘り上げた。

第3章(居神浩)は、進路選択期において、就職で起きる学歴間格差の問題を解決する社会政策を考える。進学や就職は進路指導や家族環境で、どうしても受け身になりがちであるが、主体的に選択できるためにはどうすべきか、必要な社会政策とは何かを述べる。

第4章(藤原千沙)は、成人期・壮年期の社会政策である、各章の結節点となる章であり、重要な章である。雇用労働モデルで標準化された社会政策を問い直し、そこから漏れる女性、非正規、自営、フリーランスなどへの対応が不十分なことや、成人期に「学び」が少ないこと等の問題を取り上げている。

第5章(森詩恵)は、高齢期の生活と社会政策について、高齢期に陥る生活困難などの課題を取り扱う。高齢期の生活では、所得、孤独・孤立、介護、認知症、最後の看取りなどのリスク負担が家族に集中しているが、このままで社会は維持できるのかを考える章である。

以上の第I部で人生を支える社会政策が一通り網羅されている。

第II部「ライフイベントと社会政策」では、仕事、結婚と子育て、住まい、保健医療、生活困窮といったライフイベント別構成としている。

第6章(石井まこと)は、第4章の補足にもなる仕事についてである。仕事は自由に選択できるようでいて、そうではない。どの仕事をするかで生

活は大きく変わる。また、働けなくなる＝生活不能にならない仕組みを紹介し、社会政策を補完する仕事のコミュニティや労働組合の重要性について述べている。

第7章（松木洋人）は、結婚と子育てについてである。現在の日本では特定のカップル関係を前提とする社会政策が構築され、多様なカップル・家族は排除されやすい。また、かつての「標準家族」が減少しているにもかかわらず、それを前提とする社会は持続可能なのが問われる。

第8章（祐成保志）は、住まいについてである。これまで住まいが社会政策の対象として意識されておらず、住宅は自助によるものとする日本の問題を取り上げている。この間、ようやく「居住支援」という概念が広がりつつあり、この意義が述べられる。

第9章（森川美絵）では、健康ではなくなったとき、障害をもったときについてである。それらへの対応は、保健・医療・福祉の制度によるが、人生は長くなり、それらが作用する期間も長くなっている。複雑化しストレスフルな近代化の進展により、健康な心身は個人の努力では維持しきれなくなっている。本章は、これら課題への対応を探る。

最後の第10章（垣田裕介）は、生活困窮についてである。生活困窮とは具体的にどのような状態なのか、生活困窮状態から生活を立て直していくうえで何が求められるかを述べていく。同時に、どうすれば生活困窮者に社会政策を届けられるかを述べていく。

以上の10章構成は、これまでの社会政策の教科書になかった区分である。

冒頭にも述べたように、人生をこれから、いままさに切り拓いている読者の人生読本になることを願って本書を編集した結果、こうした章構成にした。これからの生きる人に寄り添う社会政策とは何か、筆者たちも「問い」を立てつつ、本書を単なる解説書でなく、皆さんと一緒に社会政策がすべての人の人生に寄り添うにはどうすればいいか考えながら執筆した。社会政策の範囲は広く奥も深い。繰り返しになるが、本書は社会政策のすべてを網羅できていないが、その入門書として「学びが深まった」と言っていただければ幸甚である。本書が混迷を極める社会情勢の中にある皆さんの人生を照らし出す明かりになることを願っている。

2024年1月

編者を代表して  
石井まこと